

「故郷」とまどまなアプローチ

お茶の水女子大学附属中学校教諭
宗我部 義則

「『故郷』は、教えるたびに新しい発見があります」と話す宗我部先生は、これまでにいろいろな切り口で実践をされています。今回はその中から、一部をご紹介します。

「故郷」について、「教えるのが難しい」「内容が重苦しくて、あまり好きになれない」などの声を耳にすることがあります。確かに、テーマが重いと感じるかもしれません。私が、私はこれほど、さまざまな切り口で授業ができる教材はないと思っています。「故郷」は、一つ一つの表現がすばらしく、文章自体に力があります。また、作品の構造もしっかりしているのです。どこを取り上げて、深い読みにつなげていくことができます。

この教材では、かつて美しかった故郷の変貌や、「旦那様！……。」とルントウが言う前と後の、語り手の気持ちの変化などを、読み取ってほしいと考えています。そのあたりをしつかり押さえつつ、生徒たちが自分なりに作品を解釈し、言葉で意味づけしていけるような切り口を示してあげたいものです。

* * *

月が出てくる場面を比較する

この作品には、月が出てくる場面が二回あります。一つ目は、少年時代のルントウとの思い出を振り返る回想シーン。二つ目は、希望について語る最後のシーンです。この二つの場面を比較させることで、深い読みにつなげていくことができます。

月のシーンが二回出てくることには、多くの生徒が気づきます。しかし、とすれば「同じシーンが二回出てくる」と思っている子も多い。そこで、教師が「本当に同じシーンなんだろうか」と揺さぶりをかけることが大事です。すると、生徒たちは次々と、二つの場面の違いを挙げていきます。

・回想シーンでは、「緑色のすいか畑」、最後のシーンでは「緑の砂地」と表現している。

・回想シーンにルントウはいるが、最後のシーンにはいない。
・視線の動きが逆。回想シーンは、月からすいか畑へ（上→下）。最後のシーンは緑の砂地から月へ（下→上）と視線が動く。

このように、二つのシーンの相違点を挙げさせた後、なぜ違いがあるのか、その意味を生徒たちに議論させます。

「最後のシーンでは、風景の描写がぼんやりしている。語り手の思っていたルントウや故郷そのもののイメージがぼんやりしてしまっただけではないか」と意味づける子がいれば、「ぼんやりした風景に浮かぶ月は、形にならない『新しい故郷』の象徴なのかもしれない」「その『新しい故郷』にはルントウはいない」「ルントウはいないかもしれないが、次の世代のホルンたちには、いい再会をしてほしいと願っている

「旦那様！……。」の読み方を考える

生徒たちにとって、この作品でいちばん印象的なのは、やはり、ルントウが「旦那様！……。」と言う場面でしょう。

私は、三年教科書P116L9の「ああ、ルンちゃん——よく来たね……。」と、「旦那様！……。」の二つの会話の言葉をどう読むか、グループごとに考え、朗読させるという学習をすることがあります。上手に朗読することが目的ではなく、「どんな思いをどう表現するか」を大事にしている学習です。

作品の中で、「旦那様！……。」と言われた語り手「私」は、身震いし、言葉を失います。グループで朗読をさせる場合、ルントウ役を読み方が軽く感じられるときには、「語り手役が『よせよ、シюнちゃんていいよ』という言葉を返すようにさせます。すると、生徒たちは、相手が言葉を失うような読み方とは、いったいどういう読み方だろうと真剣に検討し始めます。

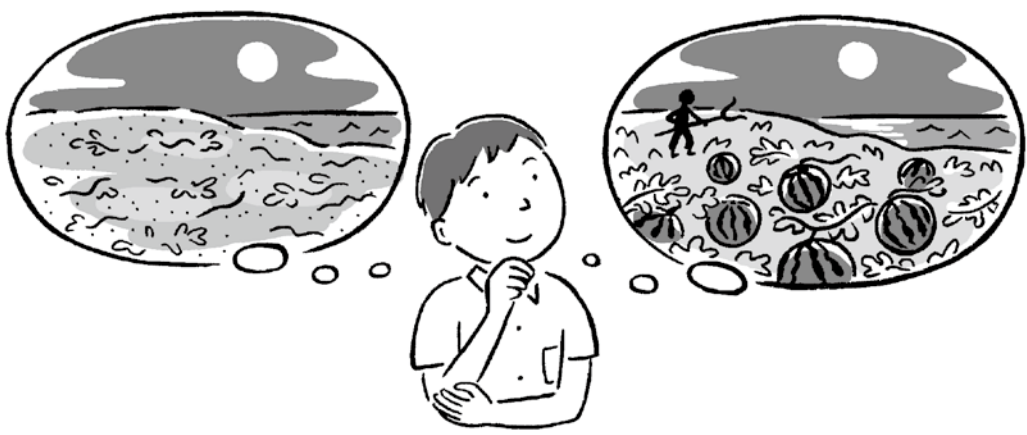
また、ルントウ役の読み方を聞いて、「自分だったらもっとゆっくり読む。なぜなら、このときのルントウには迷いがあるはずだから」などと、ルントウの気持ちも考えな

色彩表現に着目する

月のある場面を比較させるとき、生徒たちの反応を見ながら、色彩表現にも着目させるとよいと思います。例えば、「金色」と

いう言葉からイメージを広げていくと、生徒たちからは「金色は希望の象徴なのではないか」「いや、輝かしい過去の象徴だろう」「いや、未来の象徴なんじゃないか」と、そこでも議論が始まります。

また、この作品の色彩に関わる言葉に傍線を引かせていくと、回想シーンにだけ、「きらきら光る銀の首輪」「ランペイ(藍背)」「五色の貝殻」と、鮮やかな色彩表現があることがわかります。そこから、「語り手の思い出の中にだけ、『美しい故郷』がある」ということに、生徒たちは気づいていきます。色彩に着目させることで、その表現に込められた意味を身体感覚で感じることができるのです。



イラスト：田上千晶

がら、読み方を考えていきます。

ルントウ役が、低く静かな声で、ゆつくりと「旦那様！……。」と読むようになる

と、最初は、「よせよ、シユンちゃんはいよ」と言っていた語り手が、何も言えなくなり手。それは、語り手の追体験をしていることにもなると思います。



は『主従』になるのではないかと発言しました。すると、他の生徒たちから「もしかしたら、父とマンユエも、昔は友人関係だったのかもしれない」「じゃあ、ホンルとシユイシヨンも、将来は主従関係になつてしまうのかな」という発言が始め、同じことが三世代で繰り返されていくのではないかと……という議論に発展していきまし

た。そして、また別の生徒が「いや、三世代と言っているけど、私とホンルは親子関係ではない。同じことが繰り返されるように、そうではない展開があるという伏線ではないか」と発言し、議論は大いに盛り上がり

ました。また、この関係図を見ると、「六番目の女の子」の存在も気になります。この人物について議論させると、「ルントウが、シユイシヨンとホンルを仲良くさせないために六番目の子連れてきたのではないか」とか、「ルントウは自分たちと同じ思いをさせたくなかったんだ」「ルントウもつらい気持ちだったんだらうね」などという発言が出て議論が深まります。

人物関係図をつくる

小説には、必要のない人物は出てきません。少ししか登場しない人物でも、必ず何らかの役割をもっています。そのため、登場人物を整理して関係図をつくと、そこから作品全体の構造を捉えることができます。

生徒たちには、まず「故郷」に登場する人物を挙げさせます。私・ルントウ・母・父・ヤンおばさん・ホンル・シユイシヨン・マンユエ・六番目の女の子、の計九人が登場することを押さえた後、グループごとに話し合っ

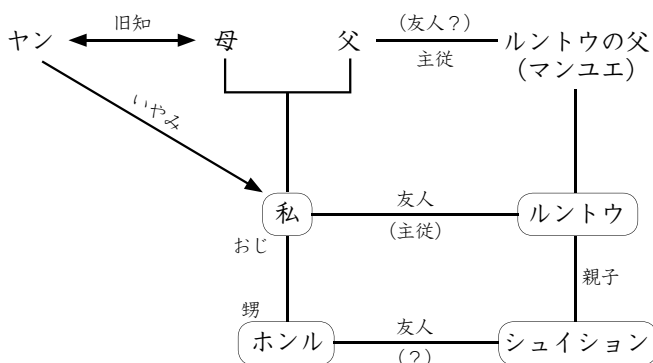
て、関係図をつくらせます。関係図をつくる前には、見本となるものを見せるとよいでしょう。人気のあるテレビドラマや映画のウェブサイトには、人物関係図が掲載されていることが多いので、そういう図を見せると、生徒たちはおもしろがって取り組みます。「世代の違いは上下で表す」「友人関係は横につないで表す」など、ある程度のルールを示してあげると、より取り組みやすいと思います。

下図は、あるグループがまとめたものです。この図を見て、他のグループの生徒が「私とルントウは、『友人』でなく、今

語り手の立場を変えて読む

「故郷」は、語り手「私」の一人称で語られている作品なので、多くの生徒は「私」に感情移入して読んでいきます。しかし、この作品を、ルントウの立場で読んで書き換えたり、三人称で書き換えたりすると、「私」を批評的に見る

ことができます。立場を変えて読むと、碗や皿を灰に埋めたのがルントウなのではと疑いの目が向けられたとき、どうして「私」はルントウをかばわなかったのか……と疑問をもったり、「心ひそかに彼のことを笑ったものだが」という、ルントウを少し見下したような表現があることに気づいたりします。そうすると、希望について語る最後の部分を、「私」が一人で勝手なことを言っているな」と感じる生徒が出てきます。ある生徒は「結局、『私』は、碗や皿をあげたこと以外ルントウにしてあげられたことは何もないのではないかと読みました。



▲生徒がつくった人物関係図

語り手の立場を変えると、ルントウ（当時の民衆）の思いや生活が浮かび上がることに

もつながり、読みを深めたり広げたりできます。

（談）

そがべ・よしのり

一九六二年埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所、教育課程実態調査問題（中学校国語）作成および分析委員を経て、平成二年生中中学校学習指導要領解説国語編作成協力者、光村図書中学校「国語」教科書編集委員を務める。

